がんばれ ネパールのおなご先生

「貧しさから脱皮し、どの子も平等に教育の受けられる国を創ってほしいと強く強く願いました。」　これは、２００７年８月８日～１９日までネパールを旅し、ポカラのさくら寮で学生のみなさんと交流し、帰国後アルバムのかたすみに、私が書き残した文章です。時は、ネパールの王制の危機のニュースが届けられた頃です。

子どもは「未来からの留学生」といわれています。急速に変化するこれからの国や世界を平和で豊かなものにするには、どの子にも平等に教育をほどこすことがなにより大切だと思いますす。一人の教師の力は、小さいけれど一粒ずつ教育の種をまき続けることが一番の近道ではないでしょうか。その中でも女の先生の存在は、たいへん大きなものです。

子どもを産み、育てる母性は、幼児期や学童期の子ども達の人を信じる心や自分に自信をもつなど、その子らしさがつくられる土台を育てます。私も結婚し、家庭をもち子どもをもうけ、教師として教壇に立ってきました。保護者からは「また、女の先生」と敬遠されたことも多かったのですが負けませんでした。「女性だからできる」「女性だからわかる」の信念で辛さや苦しさをバネに自己を磨くことに努め、今にいたっています。

３８年間の教員生活で研修し、実践してきた遊びから発展した運動（運動あそび）を中心に、この資料を作りました。学校における「体育の授業」は、体はもちろん、子どもの心や感性を大きく育てます。友だちと協力すること、ねばり強くがんばること、きまりやルールをまもること、そして寒さや暑さにも負けない体力や器用に動く体を作るなど、人として生きる力の基礎を培うことができるのです。

授業をするにあたり、子どもの想いや願いのちがい、環境や生育歴のちがい、体格や体力のちがいなど一人一人の子どものことを考え、やりかたやきまり、ルールを変えたり、用具や場所なども工夫しましょう。子ども自身が、考えながら楽しんで運動に取り組む！学校体育」が、いつの日か実現するのを願ってやみません。日本に留学してきた１期生のラミラに手渡した資料が、ネパールの地ですこしでも役だつものになることをたいへん嬉しく思い、お礼をこめてこの文章を書きました。

２０１３年２月２３日

日本国東京都新宿区立花園小学校元　校長
石　原　　詩　子